

劇と和楽と舞踊

乙姫と静、その愛のかたち



能×歌舞伎



むすめかぶ

浦島伝説 浦島 市川 櫻香

お話 内田 樹

(神戸女学院大学名誉教授 思想家)

能と歌舞伎による

船弁慶

弁慶 能脇方高安流 高安勝久

静 むすめかぶき 市川櫻香

新たな取り組みの一步を
【湊川神社、世阿弥の縁の場】
で踏み出す

「続くか、
狂いて踊れ」

能楽囃子方と歌舞伎音楽、
役者による【船弁慶】の初の試み

能は、歌舞伎のできる60年前に
このスペクタルな観世信光の作品「船弁慶」を作った。
歌舞伎への芽吹きのはじまりであった。
時代は風流を好み、
歌舞伎の始祖出雲阿国が世に現れた。
これまでにない異様な姿に人は驚き熱狂した。

きに親しむ会

平成28年

5月15日(日)

14時開演/13時半開場

会場/湊川神社神能殿
神戸市中央区多聞通3-1-1 TEL.078-371-1358

拝観料/3,000円(学生2,500円)

お申込/湊川神社社務所
TEL.078-371-0001

MINATOGAWAJINJA SHINNODEN

Noh × Kabuki

能×歌舞伎

むすめかぶきに親しむ会

「劇と和楽と舞踊、乙姫と静、その愛のかたち」

浦島伝説

素踊 浦島

舞踊

市川 櫻香

三味線

吉住小三代

唄

吉住小三友
吉住小真莉
杵屋 喜尚

お話 内田 樹 (神戸女学院大学名誉教授 思想家)

能と歌舞伎による

船弁慶

弁慶

高安勝久 (能脇方高安流)

静

市川櫻香 (むすめかぶき)

知盛

市川りき (むすめかぶき)

義経

柴川菜月 (むすめかぶき)

長唄

吉住小三代

吉住小三友

吉住小真莉

杵屋 喜尚

能囃子

野口亮 (笛方森田流)

高橋奈王子 (小鼓方大倉流)

中田弘美 (太鼓方金春流)

内田樹先生と出演者によるアフタートーク

市川櫻香 / 吉住小三代 / 高橋奈王子 / 中田弘美

「能」は、観阿弥・世阿弥父子を創始者とし、鎌倉時代後期から室町時代に大成し、宮中で上覧、また貴族や武士が楽しみました。一方、「歌舞伎」は江戸時代、庶民が楽しむ大衆芸能として盛んとなりました。日本の伝統芸能がそれぞれの枠を越えて、特色を活かしつつ一つの舞台で一つに展開する斬新な試みとなります。

【解説】

◆浦島 (うらしま)

浦島太郎の伝説は、もともと日本書紀、丹後風土記などによるものですが、この演目は、その後日談です。おなじみの浦島太郎は竜宮城へ行き、やがて望郷の念耐えがたく帰郷しますが、故郷は三百年の歳月が過ぎていました。絶望した太郎が乙姫様から頂いた満宝神書を見ると、飛行自在の秘術と長寿延年の薬法が書かれていました。太郎は日本中を飛行し、木曾川の風景に魅せられ、釣り船に乗り、終日釣りに月日を送ります。ある日、玉手箱を開くと紫煙が立ち上り、たちまち三百歳の老翁になりました。(詩人 村瀬和子)

能にも「寢覚」という曲があります。歌舞伎舞踊は、短い曲ではありますが、三味線音楽としても大変旋律の美しい曲として、今日まで残っています。一八二八年中村座で初演。

◆船弁慶 (ふなべんけい)

歌舞伎の先行芸術である能楽の名作「船弁慶」を能脇方高安流の弁慶により、特別な演出で上演いたします。

西国へ落ちていく義経一行が、大物浦から船に乗る。義経に従ってきた静御前は、ここで別れとなり、静は義経に故事を伝え頼朝との和解の時を祈ります。

やがて、船の用意が整います。船が海上に出ると、空に黒雲。風向きが変わり住吉の浜に打ち上げられます。不思議なことに、海上に西国で滅びた平家一門の怨霊が浮かび上がります。なかでも、平知盛の怨霊は、薙刀を小脇に抱え、凄まじい形相で義経一行に向かって襲いかかるのでした。

NPPOむすめかぶき

江戸幕府により、出雲の阿国等に見る女性芸能を禁じられてから二七〇年程経、九代目市川團十郎は川上貞奴をはじめとする女性俳優を後押し、その後、十代目市川三升は市川少女歌舞伎を世に送った。その先達に憧れ、真似ること「真似事」により、むすめ歌舞伎は始まった。昭和五十八年発足、昭和八十年現名称に制定し、名古屋むすめ歌舞伎旗揚場以降自主公演定例化、海外など広く各地にて公演を行う。

平成四年、十二代目市川團十郎師よりむすめ歌舞伎は市川姓を許される。能舞台での公演は平成十九年より、十二代目市川團十郎監修のもとに始まる。



内田 樹 (うちだ たつゝ)



昭和二十五年東京都生まれ。東京大学文学部仏文科卒。現在、神戸女学院大学名誉教授。武道と哲学のための学塾「凱風館」主宰。専門はフランス現代思想。ブログ「内田樹の研究室」を拠点に武道(合気道七段)、ユタヤ、教育、アメリカ、中国、メディアなど幅広いテーマを縦横無尽に論じて多くの読者を得ている。

『私家版 ヌタヤ文化論』(文春新書)で第六回小林秀雄賞受賞、『日本辺境論』(新潮新書)で二〇一〇年度新書大賞を受賞。著作活動全般に対して第三回伊丹十三賞受賞。近著に『街場の文体論』(文春文庫)。